

## スモールグループ運動の現在

福田崇

1. 背景：21世紀は人類にとって、大きな変化の時代です。
  - A. 世界的な人口増加、世界的な教育レベルの向上、世界的な通信手段の変化（ネット環境、だれでも世界中と瞬時に繋がれる）、大都市への人口集中、それに伴う村落共同体の弱体化などです。それに対応するために、国連を中心に MDGs を新しい世紀のスタートに定め、2015年にはその継続として SDGs に注力しています。国連諸機関、各国政府、NGO、宣教団体などに共通の目標です。
  - B. 世界の教会も大きな変化をとげています。カトリックでは1965年に第二バチカン公会議が終了し、十六の公文書を採択しました。教えに関する変更・追加の決定はありませんでした。教会を神の民と見る見方が前面に出てきました（教会憲章）。信徒の使徒職が強調されています（信徒使徒職に関する教令）。典礼（礼拝・祈り・賛美）を母語ですること、母語への聖書翻訳、聖書朗読・聖なる読書をすることが信徒にも奨励されています（神の啓示に関する教義憲章）。

また1974年、1989年、2010年に開催されたローザンヌ世界宣教会議で、世界のすべての民への宣教と社会的責任が強調されました。その結果、ピープル・グループ（PG）、未伝のピープル・グループ（UPG）、祈りの歩行、UPGとの養子縁組、10/40の窓、UPGへの祈りの運動などが展開され、1990年代には、キリスト教の重心が南に移りました。すなわち今までの欧米からアジア・アフリカ・大洋州・中南米のクリスチャンの数が多くなりました。宣教師も非西欧からが多くなりました。非西欧における福音の宣教の広がり、信徒運動、聖霊運動、みことば運動、小グループ運動の傾向が強いのと思います。またフィリピンやカトリックの中南米のように、福音の広がり和社会の福音化が一つのことでした。
2. しかし基本的教えの部分では変わらずに基礎信条を告白します。アメリカ福音自由教会は、「沈黙の意義」として、基本的な教えでない聖書の教えについては、各人の良心的な確信にゆだねています。教会の存在目的とその使命は変わりません。しかしそれをどのように果たしていくのか、

展開するのかわで異なる見方があります。それぞれの独創性・ユニークさがあります。今回のテーマである「小グループ」もそのような教えの一つです。

本田泰治牧師の言葉です。「信徒の方々の存在と働き、その賜物の有能さを、聖書は力強く書き記している事に、私達牧師は気づくべきかと思えます。祈禱会も、家庭集會も、洗礼準備会も、入門コースも、靈的な事は全部牧師がする、これが当たり前のように思っていたこともありますが、やはり、牧師のこのような姿勢に、聖書による牧会論の改革、信徒論の改革が必要かと思えます。信徒の方々の中に隠されている宝を牧師は引き出し、または目を覚まさせることが、日本の教会にも急務かと思えます。」

3. 宣教の広がり と 親密な小共同体（小グループ）は関連しています。非欧米における宣教では、お金のかからない宣教が指向されています。また迫害の中での宣教の展開では、教会の会堂に集まることができません。必然的に小さなグループで、様々な場所で集まるようになります。また現在のコロナのような状況、災害にあったときなどでも、数人ででも集まって、み言葉に向き合い、分かち合い、祈り合い、主の使命に生きていきます。また小グループで集まる時には、必然的に信徒が責任を負うようになります。60年前にクレマーという神学者が来日して講演し、「信徒の神学」が出版されました。そこで警告されている教職者依存の日本の教会の体質は、少しも変わっていないようです。
4. A. インドの例：クリスチャンは2.3%です。約3千万人です。ヒンズー教が強いですが、「伝染する弟子訓練」（まもなく出版予定）のダビデ・ワトソン宣教師は、会堂を建て、プログラムを用意するという、いわば「お店を開いて、人を待つ」方式をやめ、人を育てること、信徒が置かれた場でクリスチャンとして生きること、小グループで集まるという方式で、多くの人が導かれました。これは1990年代のミニストリーです。  
  
B. フィリピンの例：1974年のローザンヌ運動を受け、1975年から民族総福音化運動が始まりました。5千の教会がありました。2000年までに、すべての集落、5万に主の群れをと目標を定めました。2000年には、55,000教会となりました。同時にマニラで四つのメガ教会が70年代後半からスタートしました。それぞれスタイルは違いますが、小グループでできている教会です。それぞれ10万人をこえる会員です。この小グループ

ブ運動が、他の伝統的な教団・教派に良い影響を与えて、多くの教会が小グループ教会へ移行しています。

C.韓国の例：韓国では、オク牧師が、小グループで出来ている開拓教会を1978年に始めました。学生伝道団体は、デボーション訓練、小グループのリーダー訓練などを行っているのに、「地域教会」という文脈では伝統的な教職中心・会堂中心・プログラム中心である状況を憂え、新しい教会形成を進めました。これが他の教会にも普及しています。

D.カトリックの動き：ミサに出席すれば十分であったのが、様変わりしています。1981年ごろからフィリピン発で全世界のカトリック教会に広がった、「キリストのための夫婦(CFC)」という運動があり、主日の午後、小グループで集まり、その日の聖書朗読の四か所(詩編・旧約・使徒書簡・福音書)、説教を振り返り、受け止め、それぞれの生活の中に、人生の中に受肉することを目指しています。私たちの奉仕したフィリピンの山岳地帯のカトリック教会は、ミサに200名出席ですが、その半分がそのような運動に入っています。また南米からスタートした、「キリスト教基礎共同体(BCC)」運動、イタリアで始まった「新求道期間の道」などは小グループに重点をおいた動きです。フィリピンでは、キリスト教基礎共同体は、1969年にスタートし、50周年を昨年迎えています。

鹿児島教区司教の中野裕明師は、次のように書いています。「教会は神のことばの上に築かれます。教会は神のことばから生まれ、神のことばによって生かされます。(主のことば3)」は、現在の日本の教会にとって、最も重要なテーマであると考えます。

5. 鍵の言葉は、信徒・聖霊・神のことば・小グループであると思います。最後に教職者の重い務めについて述べたいと思います。以上述べてきたことを受け止めるときに、教職者は「聖徒を整える(エペソ4:12)」という務めと向き合うこととなります。自分で務めを実行した方がよほどたやすいと思われても、信徒を育てる・任せる、そして信徒と協働することが主に喜ばれることという確信が大切です。